

# あまのすの エピローグ

平成23年3月11日午後2時46分。東北・関東地方を中心として大きな地震が起き、甚大な被害がもたらされた。

各地域にて被災された皆様にまずお見舞いを申し上げます。また災害により幽明境を異にされた皆様には心よりお悔やみを申し上げご冥福をご祈念申し上げます。そして避難所生活を続けられている皆様には、一日も早く日常を取り戻せるよう、私ができることに尽力させていただきます。私なりの日送りをさせていただきますことをお伝えしたい。

その時私がかつての職場である諏訪中央病院にいた。個人的な用事で訪れていた。揺れを感じ部屋の調度品をみると、確かに揺れていた。ドアも壁も。何回か断続的に揺れたあと、冷静

に対処するようにとの院内放送が流れた。その後も立て続けに緊急地震速報が鳴り、長野県北部にも大きな地震が起きた。私の住む松本市から塩尻市にかけては牛伏寺断層という活断層も存在するため、連動して揺れが起きるのではないかと、今なお不安が続いている。報道等にて伝えられる甚だしい被災状況を見るにつけ、心が締め付けられる思いがする。おそらく私だけではないだろう。常に「命」「生死」と向き合う立場にある「僧侶」各位におかれては、居ても立っても居られない思いを抱かれていますのではないかと思います。ある新聞記事にて「被災地での読経供養」をされている、東北のわが宗派の僧侶の皆様の活動が紹介されていた。被災地にあつて、おそらくはご自身も何ら

「なごみの里で柴田久美子さんと「ターミナルの水先にある、幸齢者の島より」



埼玉医科大学の大西秀樹先生と「遺族外来のある病院より」



かの形で被災されたと思われる皆様、「そうせずにはいられない」「一心で読経されているお姿を思うにつけ、自然と涙がこぼれてきた。被災を受けたその現場に立つて、私は読経することができようか。声を出すことができないだろうか。自信が無い。

現在「遺族ケア」について研究を進めている。今までの「あまのす」としてのコーナーの記事も「死別」「看取り」「ケア」等がキーワードとなっていた。しかし、今回の震災発生から今日までの一連の動きをみると、「死別」「看取り」について考えることができる時間があること、「有難さ」をしみじみと感じるのである。同時に、その猶予もなく旅立たねばならなかった方々の無念を、旅立ちにあたっての

準備を進めていたにも関わらずそれを果たせずに旅立たざるを得なかった方々の無念を思うと、言葉を失ってしまうのである。「遺族ケア」については、緩和ケアとの関連の中で論を進めるべく研究を重ねている。来年はまとめたいと考えている。

講演にて東北に赴いた折、これまでの私の活動紹介の一端として「チェルノブイリ原発事故による被災者支援活動」についてお話しすることがあった。そう遠くない昔のことである。当時は、そのような事故が日本で起こるとは思っていなかった。後手にまわってしまった政府や業者の対応の悪さを指摘することはたやすいが、それを受けて、私たちのライフスタイルの変更も余儀なくされるであろう。その際「禅の生活」という視点から、

株式会社出口久美子さんと「死別の悲嘆にひたまりを正し」



あまのすと東昌寺ファミリー



社会に対して様々な提言ができていないだろうかとも考えている。知恵を出し合い、力を出し合つて、「日常」を取り戻すために頑張りたい。

あるフリージャーナリストが「頑張るのは私たちです。被災された皆さんは、元気を出してください」と言った。私は大きく頷いた。私は頑張らなければならぬ。かつての上司は「がんばらない」というベストセラーを書いたが、今、私は、とにかく頑張りたいのである。

6年間の長きにわたり、読者の皆様と共に過ごさせていただけたい。心より御礼を申し上げます。皆様のご健勝とご活躍をご祈念し筆をおくことにする。

飯島恵道 合掌